

実践報告

文章構成に着目した評論文の読みの深まりに関する考察
—中学校第2学年国語「文章の魅力を探ろう」の授業分析を通して—

原口 直哉*

Considerations on Critical Essay Reading Focusing on Text Structure :
Through a Class Analysis of the Second Year Japanese "Let's Searching
for Appeals in Text"

Naoya HARAGUCHI*

【要約】

本単元では、説明的文章の中でも筆者がある事柄に関して自分の価値を示した評論文「君は『最後の晩餐』を知っているか」を扱った。生徒達には、内容の読み取りと同時に、筆者が、自分の思いや考えを述べるために、文章構成を中心にどのような工夫をしているかを掴ませ、自分の考えをもつ授業を行った。評論文において、文章構成と筆者の考えは、密接に結びついており、文章構成を意識することで、筆者のねらいをより明確に掴むことができると言える。

【キーワード】

構成、筆者のものの見方や考え方、話し合い

1. はじめに

中学校学習指導要領の第2学年「読むこと」の指導事項に「文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。」とある。文章を読むときに、内容を掴むだけではなく、どのように書かれているかを捉えながら読むことは、内容をより正確に理解することにつながる。また、自分が表現する立場になったときに、より適切な方法で文章を書くことができるようになる。今回、学習用語として構成を取り上げ、筆者の書き方を掴む観点とした。文章構成は、文章全体に大きく関わり、筆者の思いや考えを捉える上で、重要だと考えたからである。

本研究の主教材である「君は『最後の晩餐』を知っているか」は、レオナルド・ダ・ヴィンチの壁画「最後の晩餐」のかっこよさを、解剖学・遠近法・明暗法の三つの科学的視点から分析した作品である。「最後の晩餐」に関する情報や筆者の思い・考えが、科学的に分かりやすく書かれているだけではなく、筆者の視点の変化や問いかけの多用、具体例の提示など、読み手を引きつけるための工夫も随所に見られる作品となっている。内容の分かりやすさだけではなく、読み手を引きつけるための工夫も含めて、どのような書き方がなされているかをとらえていくこととした。

2. 単元の内容

まず、本単元の展開部初程では、「君は『最後の晩餐』を知っているか」について、「言葉の使い方」「表現の仕方」「論理の展開」の3観点から作品の魅力をもとめさせた。「言葉の使い方」では、「専門的な言葉を用いて分かりやすい」、「『かっこいい』という言葉で引きつけてある」などがでてきた。「表現の仕方」では、「語りかけが多く親しみがわく」、「同類の言葉が列挙してあり分かりやすい」などがでてきた。「論理の展開」では、「説明+『だから』+『結論』の繰り返しで分かりやすい」、「『しかし』

*佐賀大学文化教育学部附属中学校

のあとに別の視点から物事をとらえていて説得力を高めている」などがでてきた。次に、展開部中程では、文章構成を中心に作品の魅力をまとめさせた。文中に出てくる人物と文章構成との関係を三角形の図形を用いて整理し、作品の魅力をまとめていくものである。本作品は、「国語2」（光村図書）の中で、単元名「きずなを読む」の中に位置づけられており、「君は『最後の晩餐』を知っているか」では、誰と誰のきずなが、どのような文章構成の工夫で描かれているのかを探っていく。最後に、展開部後程では、誰と誰のきずなが、どのような文章の書き方の工夫で描かれているのかをワークシートにまとめさせて、本作品を読んだことがない中学生に対しての推薦文を書かせた。

単元の授業過程は以下に示す通りである。

全5時間

- 1 本時の課題を知り、学習への見通しをもつ。(1時間)
(広告コピーをもとに意見の書き方について関心をもたせる。)
- 2 「君は『最後の晩餐』を知っているか」の文章の魅力をつかむ。
 - 2-1 言葉の使い方・表現の仕方・論理の展開の3観点から魅力をまとめさせる。(1時間)
 - 2-2 作品に出てくる人物と文章構成との関係から魅力をまとめさせる。(1時間)
- 3 「君は『最後の晩餐』を知っているか」を読んだことがない中学生に推薦文を書く。(1時間)
(きずなの内容と書き方の工夫をワークシートにまとめさせ、推薦文を書かせる。)
- 4 学習の振り返りをする。(1時間)
(推薦文の回し読みをさせ、相互評価をさせる。)

3. 授業の実際

(1) 文章中の人物と文章構成をマーキングをもとにつかませる。

文章中に出てきた人物に印をつけさせた。次に、この文章が大きく3つに分かれていることから、序論・本論・結論の文章構成を確認し、それぞれの部分にどのような人物が出てくるのかを整理した。文章構成と人物の関係は以下ようになる。

表1 文章中の人物と文章構成の関係

【登場する人物】	【文章中での書かれ方】
[序論]	
・ダヴィンチ	… レオナルド・ダ・ヴィンチ, レオナルド, 彼
・筆者	… 私
[本論]	
・ダヴィンチ	… レオナルド, 彼
・キリスト	… 中央の人物, キリスト, 彼, 十三人の男, 描かれた人物
・弟子	… 十三人の男, ある男, 別の男, 男たち, 人物, 三人ずつ, 隣の人物, 弟子 描かれた人物
・君	… 君
・絵を見る人	… 絵を見る人
・修道士	… 修道士
[結論]	
・ダヴィンチ	… レオナルド
・私たち	… 私たち, 二十一世紀の私たち
・見た人	… 絵が完成したばかりのころ, それを見た人たち
・君	… 君, 自分

序論・本論・結論の全てに名前が出てくるのは、ダヴィンチで13回である。最も多く名前が出てきたのはキリストと弟子で、本論に26回出てきた。生徒たちも、マーキングをすることで、次のような主立った人物の配置を視覚的に掴むことができた。

- ・[序論]… レオナルド 私
- ・[本論]… レオナルド 君 キリスト 弟子
- ・[結論]… レオナルド 私たち 君

(2) きずなの内容と文章構成のつながりをまとめさせる。

表1のように、序論・本論・結論の各部にどのような人物が出てきたのかを整理した。これをもとに、本作品は、誰と誰のきずなが書かれた作品であるのか。それは、文章構成のどのようなところから分かるのかをまとめさせた。まず、個人で考えさせ、その後、グループで情報交換をし、ホワイトボードにまとめさせたのが以下に示すものである。

表2 きずなの内容と文章構成の関係

1班	… キリストと弟子 本論にキリストが磔になるかもしれないという予言で、失意、怒りなどの感情を抱いていることや、消失点がキリストの額になっているから。
2班	… レオナルドと読者 結論部分の中心人物がレオナルド・ダ・ヴィンチと読者だから。
3班	… レオナルドと君 結論でレオナルドが絵の構成などに込めた想いを君(読者)に伝えているから。
4班	… レオナルドと私たち 本論や結論で、レオナルドが使える技術を最大限に利用して、私たちが「かっこいい」と思える絵を描いたから。
5班	… レオナルドとキリスト 序論と本論から分かるようにレオナルドの技術をすべてキリストの最後に終結させているから。
6班	… レオナルドとキリスト 絵をうまく表現するには、その目的となるものを詳しく知らないといけないから。キリストの顔を中心にしてしまうくらい好意をもっていた。
7班	… キリストと彼の弟子たち 本論の最初にキリストと彼の弟子たちの一つの場面を描いた絵だと書いてあるから。
8班	… キリストと弟子 本論にキリストとの別れを知り、食事もせず動揺している弟子の姿があるから。
9班	… レオナルドと私たち 結論に筆者が一番述べたかったこと(芸術は永遠なのだ)が書かれているから。
10班	… レオナルドと私たち 序論の「最後の晩餐はかっこいい」というところから筆者の興味が見られる。結論でレオナルドが見る人を意識していることが分かる。

各班から出てきたホワイトボードは黒板に3列にわけて張り出した。1列目は、図1のように、キリストと弟子について書いたもので、1班7班8班が該当する。2列目は、図2のように、レオナルドと読者について書いたもので、2班3班4班9班10班が該当する。3列目は、レオナルドとキリストについて書いたもので、5班6班が該当する。誰と誰のきずなのかを文章を対象にして考えるのではなく、「最後の晩餐」という絵画そのものを対象にして考えている班があった。筆者が、誰と誰のきずなをこの文章で描こうとしているのかを、しっかりと押さえた上で考えさせるべきだった。

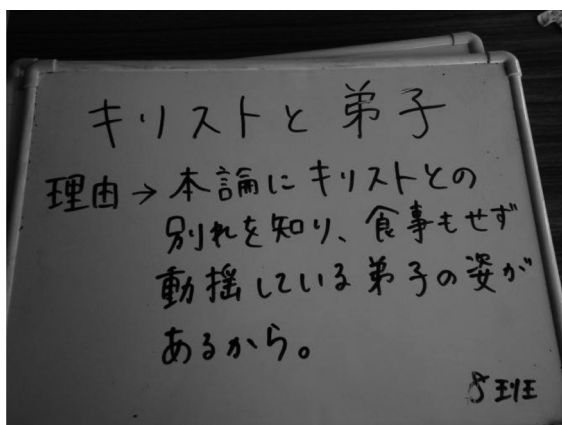


図1 キリストと弟子

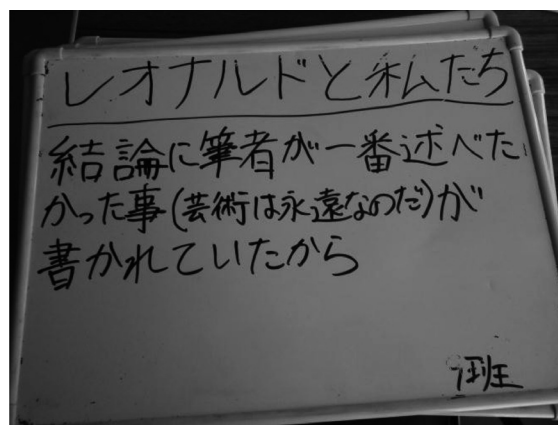


図2 レオナルドと読者

表3 5班の話し合い活動の概要

- Y 私たちとレオナルド？ レオナルドは今の私たちのことまで考えていないと思う。たぶん、キリストに対する思いが強い。
- K レオナルドが力を使っているのはモナリザじゃない。
- Y 遠近法、明暗法とか、格子模様とかモナリザは使っていない。キリストに対して技術が集結されているよ。
- K 壁に書いてあるでしょう。これも遠近法じゃ。
- Y キリスト。右のこめかみにくぎ打ち付けて。キリストに対して。キリストに申し訳ない。
- K どうする。
- Y キリストと弟子。レオナルドと読者。序論か結論か。
- K 結論。私たちとレオナルド。結論が大切でしょう。本論は過程だから。
- Y どっちもどっちでしょう。本論から分かるようにレオナルドの技術が集結されているから。レオナルドとキリスト。

(3) 5班の交流

この班は、自分の考えをしっかりと持ち、主張することのできる生徒が多い。男子Yは、私たちとレオナルド、レオナルドとキリストの二つの意見を述べている。両者とも、本論部分に焦点を当て、「レオナルドは今の私たちのことまで考えていないと思う。」という言葉からも分かるように、レオナルドの視点からレオナルドと誰が結びついているかを考えている。一方、男子Kは、「結論が大切でしょう。本論は過程だから。」と述べているように、筆者の視点から誰と誰を結びつけているかを考えている。「誰と誰の結びつきか。」という発問に対して、違う視点から意見を述べあい、話し合いがかみ合わない状況になっている。表2のところでも記したように、「筆者は、この文章で、誰と誰のきずなを描いているのでしょうか。」と発問内容を再度確認させる必要があった。筆者の視点で考えさせることをしておけば、序論・本論・結論という文章構成との関わり合いで話し合いがより深まっていったのではないかと考える。

(4) 「人物カード」「文章構成カード」「図形」を用いて、きずなの内容と文章構成のつながりをまとめさせる。

各班で、きずなの内容と文章構成のつながりをまとめさせることで、誰と誰のきずなが文章構成との関わりでどのように描かれているかが見えてきた。次に、人物、文章構成、きずなの再整理をして、筆者の述べ方の工夫を考えるヒントを捉えていった。再整理のために黒板に貼るものとして、「人物カー

ド」(筆者・君・レオナルド・キリスト・弟子)、「文章構成カード」(序論・本論・結論)、図形(三角形)を準備した。発問は大きく2つのことを行った。1つ目は、「文章中に出てきた人物で、特に重視すべき人物は誰でしょう。」である。これに対して生徒からは、筆者、レオナルド、君(読者)の3名の名前が挙がった。次に行った発問と説明は、次の通りである。「3人の人物と文章構成、きずなを再整理してください。三角形の頂点に人物、辺の赤線部分にきずなでつながっている人物、辺の所に序論・本論・結論がきます。」この指示で、2名の生徒M、Tが黒板につくったものが、次の図3、図4になる。

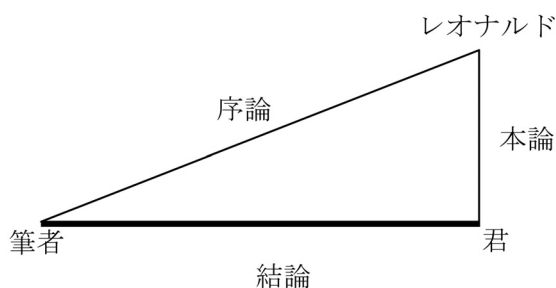


図3 生徒Mの考え

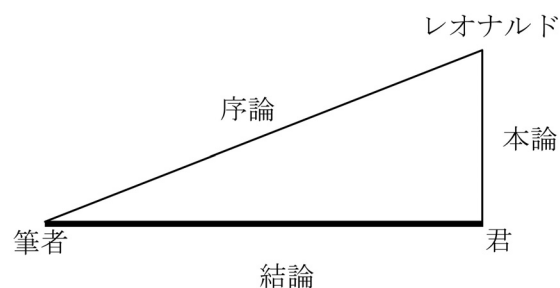


図4 生徒Tの考え

2名の生徒とも筆者と君のきずなを示した。他の生徒の多くも筆者と君のきずなを答えていた。文章構成との関わりでは、筆者とレオナルドの結びつきは、序論・本論部分。筆者と君の結びつきは、本論・結論の部分。君とレオナルドの結びつきは、結論部分と答えた生徒が多かった。まとめると次のようになる。

- ・筆者とレオナルドの結びつき 序論 本論
- ・筆者と君の結びつき 本論 結論
- ・君とレオナルドの結びつき 結論

序論・本論・結論と内容が進むにつれて、レオナルドと結びついた筆者が、君との関わりをもち、レオナルドと君とを結びつけようとしている流れが見えてくる。ただ、序論・本論・結論が三角形のどこにくるかについては、生徒によって微妙に違い、どのような根拠から、その場所に位置づけたのかの意見交流を行うと、内容理解がより深まったのではないかと考える。この後、次の2つの発問を行った。1つ目は、「筆者は、誰と誰にきずなを築いてほしいのだろう。」である。この発問に対して生徒たちからは、「君とレオナルド」という答えがすぐに返ってきた。続いて行った発問が、「どうして君とレオナルドのつながりが書かれていないのだろう。」である。この発問に対して、「伝えたいことをあまり書かずに、自分の力でレオナルドとのきずなを生んでほしかったから。」という答えが出てきた。授業者が、きずなの内容と文章構成のつながりを確認させる場面でねらっていたことが出てきて、全体でも共有することができた。

(5) 作品の魅力の内容と文章構成のつながり、3観点からまとめさせる。

本時は、主に、内容と文章構成のつながりを中心に授業を進めた。前時では、3観点からみた筆者の述べ方の工夫について取り上げている。最終的な魅力をまとめるにあたって、本時の内容と前時の内容を結びつける発問『自分の力でレオナルドとのきずなを生んでほしい』という意見があったが、言葉の使い方・表現の工夫・論理の展開に反映されているところはありませんか。』を行う予定をしていた。だが、十分な時間をとることができずに、作品の魅力をもとめる活動に進んでしまった。最後の発問は、

「この文章の魅力はどういうところだろう。」である。この発問に対して、生徒が板書したのが、「登場人物の言い換えがしてあって、親しみが感じられるところ。」「問いかけや『 』を使い、強調してあって分かりやすい」であった。登場人物の言い換えは、筆者が、レオナルド・ダ・ヴィンチと呼んでいたものをレオナルドという言い方に途中から換えていることを指している。これは、筆者がレオナルドとの結びつきの強さを表している表現だと言える。また、問いかけは、読み手に対するものが多く、筆者が読者とつながろうとしていることが感じられる。筆者が、君とレオナルドとのつながりにほとんど触れず、レオナルドと君それぞれとのつながりを大切に話を進めていることが分かる。ただ、きずなの内容と文章構成とのつながりが、3観点の工夫とどのように関わっているかを、しっかりと確認しないまま作品の魅力を考えさせたので、前時と本時の内容が結びつかず、本時の内容に限った魅力を生徒たちが答えることになってしまった。授業のワークシートには、作品の魅力について、次のような記述があった。

- ・レオナルドの絵を細かく見ながら、読者をレオナルドの絵の中に入り込ませ、レオナルドと読者を結びつけていっている。
- ・読者に「最後の晩餐」の良さを知ってもらうために、序論・本論・結論と役割の違う3つを順を追って説明することで、読者の興味を引き出している。
- ・いつの間にか読者とレオナルドがつながるような書き方をしている。
- ・筆者が「最後の晩餐」で最も伝えたいこと(レオナルドと君をつなげる)をわざと書かずに、最終的に自分で感じられるようにしているところ。

ワークシートに書かれていた内容も3観点から見た書き方の工夫が十分に反映されたものはなかった。ただ、あえて、レオナルドと君とのことを書かずに、主体的に君がレオナルドにつながってほしいという筆者の思いを理解している生徒は多かった。

4. 終わりに

作品の魅力を探ることを主眼に置いて授業を計画した。魅力を探るに当たって、きずなの内容と文章構成の関わり、3観点(言葉の使い方・表現の仕方・論理の展開)から考えていくこととした。まず、きずなの内容と文章構成との関わりでは、生徒から「21世紀の君とレオナルドのことをあえて書かずに、2名のつながりを際だたせている。」という答えが出てきて、ねらいは達成することができたと考える。ただ、誰のことがどこに書かれているかという文章構成については、発表した2名の生徒の意見に違いがあり、曖昧さが残ったように感じる。登場人物と序論・本論・結論の結びつきについて交流の場を設けることで、序論・本論・結論の内容や働きを明確にすることができたのではないだろうか。そしてそれが、より一層、文章を細かく丁寧に読むことに通じていったように思える。結論部分を見ると、誰の名前が出てきているかだけでなく、その人物がどうしたのかという部分も大切になってくる。「レオナルドが暮らし、この絵を描いたミラノの町」「自分の目で見てほしい」などである。レオナルドと読者との接点を見いだしたり、読者に特定の行動を促す表現がされていたりして、より細かく文章を読むことで、結論部分のもつ働きが鮮明になってくる。

次に、3観点についてである。前時に3観点から本作品の述べ方の工夫を探っていた。これをきずなの内容と文章構成との関わりの部分で出てきた「21世紀の君とレオナルドのことをあえて書かずに、2名のつながりを際だたせている。」ことを念頭に置いて、再度、見直してみることを予定していたが、時間の都合もあり、組み合わせで考えることができなかった。筆者が読者に対して問いかけを多用していたり、レオナルド・ダ・ヴィンチのことをレオナルドと呼んでいる所など、筆者がレオナルドや読者

とのつながりを強めながら、読者とレオナルドとのつながりを生み出そうとしているところが感じ取れる。きずなの内容と文章構成の関わり、3観点の2つを組み合わせれば、筆者の作品に込めた思いを理解し、本作品の組み立てのすばらしさを感じ取ることができたのではないだろうか。

では、実際、1時間の授業の中でどのような展開が可能であったのか考えてみる。例えば、文章中に出てきた人物をマーキングで確認した後、「この中で重視すべき3人の人物はだれでしょう。」の問いを入れ、人物と文章構成ときずなを整理する活動を中心とする流れである。きずなを個人やグループで考えさせたことには、2つ見直すべきところがあった。1つは、文章に出てくる人物間のきずなのか、絵の中の人物のきずなのか、生徒たちに混乱があったことである。もう1つは、いろいろな人物のきずなを考えさせていながら、その後、3人に絞ることで、前後の活動のつながりがなくなり、ホワイトボードに書いた活動があまり意味をなさなくなったことである。重視すべき3人を選んだ後は、誰と誰のきずなのか、序論・本論・結論の働き、3観点との結びつきについて考えさせていくべきであった。あるいは、序論・本論・結論の働きが、3観点の述べ方と重なる部分があり、図形を用いた整理の時に、この両者を取り上げるという方法もあった。板書のイメージとしては図5のようなになる。重要視する3人に絞ったところから授業を進めると、生徒の思考の流れの上でも、時間的な制限の上でも、改善できたのではないかと考える。

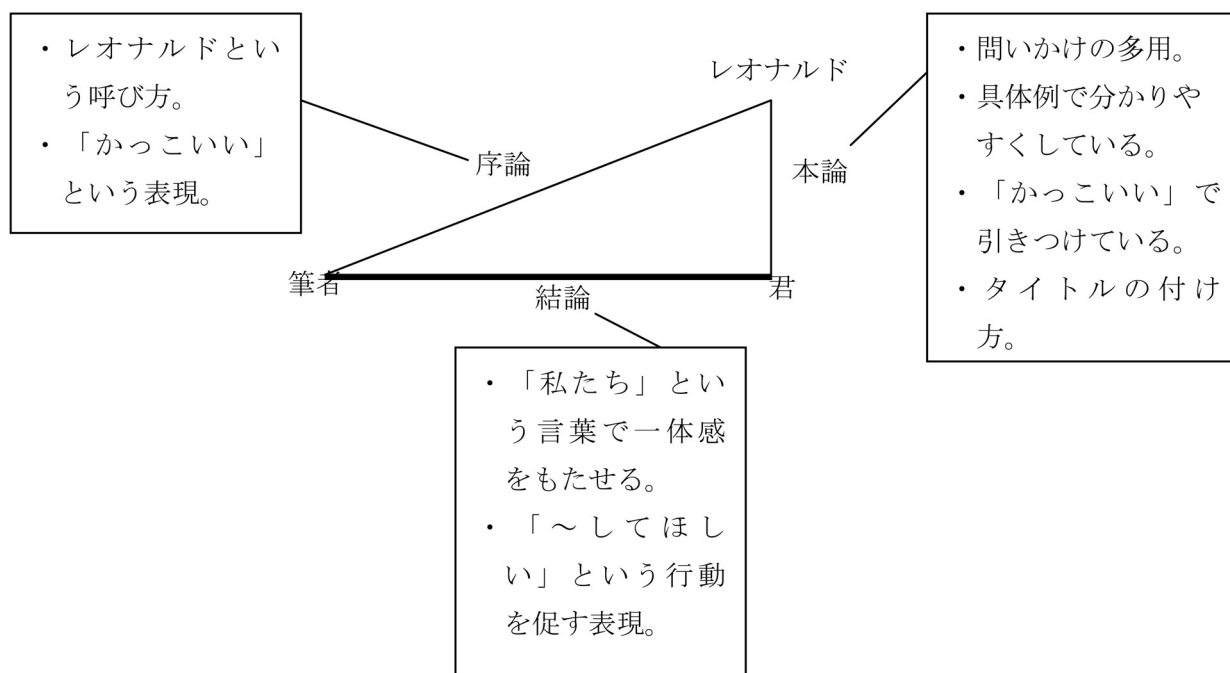


図5 板書のイメージ

【参考文献】

文部科学省 『学習指導要領解説 国語編』 2008.9